木立の向こうに鹿の影が見える。

ゆっくりとサイドブレーキを引く。両手でそっと車のドアを開け、閉める。普段はワハハ、と大きな声でよく笑う大男は、人が変わったように静まり返っていた。猟の始まりだ。

忍び猟

岩手県大槌町と、隣接する遠野市との境界に位置する新山（しんやま）が、兼澤幸男さん（35）の猟場だ。新山には山のところどころに町が管理する放牧場があり、栄養豊富な牧草を求めて野生の鹿が入り込んでくる。辺りは霧に包まれて真っ白だ。夏の三陸沿岸に特有の現象「やませ」の影響である。兼澤さんは驚くほど音を立てずに放牧場を進んでいく。目を凝らすと、ズボンが擦れ合う音がしないよう、わずかに脚を開いて歩いていることが分かる。靴の側面が草に当たる音や、立ち上がった柔らかい草を踏み潰す音を立てないよう、一歩ずつ足の置き場を選んでいる。木立を指差し、振り返って口元に指を立て、静かにするようにと指示を出すと、ゆっくりと腰を下ろす。リーリーという虫の声。ギギギっと鳴く鳥の声。木の葉に溜まった水がポタリと滴る音しかしない。兼澤さんはすっと腰を上げて数十センチほど前に進んで鉄砲を構えたが、やがて銃口を下ろすと再び岩のように固まった。木立の向こう側にいる鹿との睨めっこは10分以上続いている。腰を上げずにわずかに体の向きを変え、もう一度鉄砲を構えたが、また外してサッと立ち上がった。「手前のでかい雄が警戒してる。群れの中にいる若い個体を射程に入れたいけど、やませで見えなかった」と、諦めてその場を離れた。狙うのは、臭みがなく肉が柔らかい3歳までの雄と4歳までの雌と決めている。

頂上付近のポイントで車を降りる。忍び足で進んでいき、急に立ち止まって姿勢を低くした。100mほど先に、霧の中で草を食む

1.一歩一歩忍び足で進んでいく。2.大槌湾に浮かぶ町のシンボル「弁天島」。ひょっこりひょうたん島のモデルになったと言われている。
3.兼澤さんの妻・華奈さんは鹿の角に「マクラメ編み」という編み物を合わせたタペストリーを作っている。

鹿の姿が見えた。私には2頭の影が辛うじて見えるだけだが、彼には7頭の群れが見えていた。奥の小さな鹿を狙う。カチャ、と鉄砲に弾を込めてスコープを覗き込む。パーンという爆発音が耳をつんざく。霧で隠れていた20頭ほどの鹿が蜘蛛の子を散らすように逃げていった。息を切らして倒れた鹿に駆け寄り、鎖骨のあたりにぐぐっとナイフを入れる。ナイフを引き出すと同時に勢いよく血が溢れる。流れ出した血は、草と土にたちまち染み込んでいく。その光景は想像していたよりずっと穏やかだった。ナイフを腰に仕舞い、さっと手を合わせる。弾は耳の下に当たり、後頭部から抜けていた。真っ黒な目は開かれたままで、口は半開きになっている。唇と歯には緑色の液体が付いていて、撃たれる直前まで草を食んでいたことが窺える。「頭を狙うっていうことは、即死か外れるかということ。外れれば何不自由なく元気に過ごすし、当たれば即死するからス